京都大学
KYOTO UNIVERSITY
総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies ／ Human and Environmental Studies

No. 62

総人環

2019.3

総人・人環 広報

特集　ご退任を迎えられる先生方から

悩ましきものとしての教育……小山　静子……2
忘れ得ぬ人々……齋藤　治之……4
京都大学生の留学、昨今……藤田　糸子……6
思い出すままに……髙谷　修……8
8年間の“二足の草鞋”……加藤　立久……10

連載企画「総合人間学とわたし」

ご都合主義的「総合人間学」……月浦　崇……12
総合人間学と文学の交わるところ……池田　寛子……14
総合人間学ってなんなんや💢……酒井　敏……16

ご退任を迎えられる先生方から

悩ましきものとしての教育

小山　静子
（総合人間学部 人間科学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻）

あと少しで退職かと思うと本当に嬉しい。こんなことを書くと、授業を聞いてくれていた学生たちやこれまで一緒に働いてきた教職員の方々に失礼ではないかという心の声が聞こえてくるのだが、退職を心待ちにしているというのはいかんともしがたい気持ちである。そしてどうやらその源には、教員であるということと、教育学を担当しているということとの二重苦があるようだ。

振り返ってみれば、中学生のころから学校や教師と相性が悪いと感じるようになった。特段のトラブルが起きたわけでもないし、平穏な中高生時代を過ごしたのだが、なぜか学校が好きではなかったし、教師には絶対になるまいと思っていた。恐らく、何事も真面目に努力し、明るく積極的に活動するという、教師が期待する生徒像が、わたしには無理だったのだと思う。そんなこんなで、学校という場がもつ空気が苦手だった。大学に入って、どうして学校のような嫌なものがこの世にあるのかと考えはじめ、歴史的な視点から学校の成り立ちや教育という営みを明らかにしてみたいと思うようになった。入学したのは文学部だったから、進路選択にあたって、文学部の現代史にするか、教育学部に転学部して教育史をするか考えたあげくに、後者を選んだ。それがとんでもない思慮の浅い選択だったことに10年ほど後に気づくことになる。

教育史というのは、文字通り教育の歴史なのだが、歴史学の一つの研究対象として教育を取りあげるのか、教育学の一領域として歴史を扱うのかという違いがあることを、院生も終わる頃になってやっと知った。わたしはといえば、教育学そのものにはほとんど興味がなく、いうまでもなく前者の立場だったし、わたしの周りの人たちもそうだったのだが、それは教育史全体からみたら極めて少数派だったのである。そして教育学研究科の出身ということで、大学に就職するときには教育学関連科目の教員となるらしいということもわかってきた。ただでさえ教員になることに抵抗感があるのに、よりによってなぜ教育学を教えることになるのかと茫然とした。迂闊極まりない話である。そしてあろうことか、最初に就職した大学では、教職課程担当教員として主に社会科教育法と教育原理を教えることになった。

だから、人環に赴任したときは、教職課程から離れることができたということで、本当に嬉しかったのだ。それにわたしの関心はもう教育史の枠組みではとらえきれなくなっていて、ジェンダーを分析概念として用いながら教育や家族の歴史研究をしていたから、人環のような学際を掲げているところはうってつけだとも思った。二重苦からは逃れられないものの、何といっても教育臭さがあまりない人環の雰囲気が好きだった。

若い時は、学校なんて行きたい人だけが行けばいいと思っていたが、学校の役割はそれなりにあると思うようになり、柄にもなく真面目に学生とつきあってきた。それはそれで楽しい時間だったように思うが、教育の意義について正面から語る気にはならないので、いろいろとためらいがちに、言葉を選びながら、授業をすることになった。どうしてこんなに教育嫌いなのかと自分でもあきれるほどだが、やはり教育が善なるものを装いつつ、その実、とても権力的な営みであると、わたしが思ってしまうからだろう。

わたしが京大に赴任してから18年ほど。この間、日本における教育をとりまく環境の変化はすさまじく、京大もその流れに巻き込まれ、大学全体がどんどん濃密な教育空間に変貌していくのを目の当たりにしてきた。わたし自身、当事者として関わらざるをえなかったこともあるし、致し方ないと思うところもあるのだが、しかし教育は熱心にすればいいというものではないし、教育の過剰がもたらす問題があると思ったりもする。それに教育の効果など、あるかどうかも含めて、すぐにはわからないと考えてしまう。そしてわたし自身は、教育機関に身をおくことがどんどん辛くなっていき、何をしているのかと自問自答することが多くなった。

何とも鬱陶しいことを書いてしまったように思うが、最後によき思い出を書いておきたい。京大に赴任してびっくりしたのは、学生も教員もごく自然に「研究」という言葉を使っていることだった。それまで勤めていた大学はマンモス化した私立の総合大学だったが、教員は学生に研究なんて言っても通じないという思いを抱いていたし、学生自身も大学で勉強していることを研究という言葉で表現してはいなかったように思う。ところが赴任直後に出席した総合人間学部の合同ゼミで、教員は「何を研究するつもりだ」と学生に自然に問いかけ、学生は「○○を研究しています」とごく当たり前のように返事をしていた。わたしにとって、これは驚くべき出来事であり、研究という営みが当然のごとくに意識されていることに本当に感心した。ここはまだ大学なのだと痛感し、京大に勤めるということの意味を自覚しておかなければならないと思い知らされた瞬間だった。

そしてわたし自身は、自分の研究テーマを追究するだけでなく、院生たちに若手研究者も交えて共同研究を続けてきた。共同研究が一区切りつくと、その成果を本として出版し、また新しいテーマでメンバーを募って共同研究をするということを、数年ごとに繰り返してきた。人環にいたからこそ、こういうことができたのであり、それは何ものにも代えがたい貴重な財産になっていると思う。

教育という営みに違和感をもち続けたわたしが、曲がりなりにも定年まで大学に勤めることになるなんて、とても不思議な気がするが、それにはやはり授業でつきあってくれた学生たちの力が大きい。そして折にふれて声をかけてくださった教職員の方々には感謝の言葉しかない。心よりお礼を申し上げたいと思う。

（こやま　しずこ）

ご退任を迎えられる先生方から

忘れ得ぬ人々

齋藤　治之
（総合人間学部 認知情報学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻）

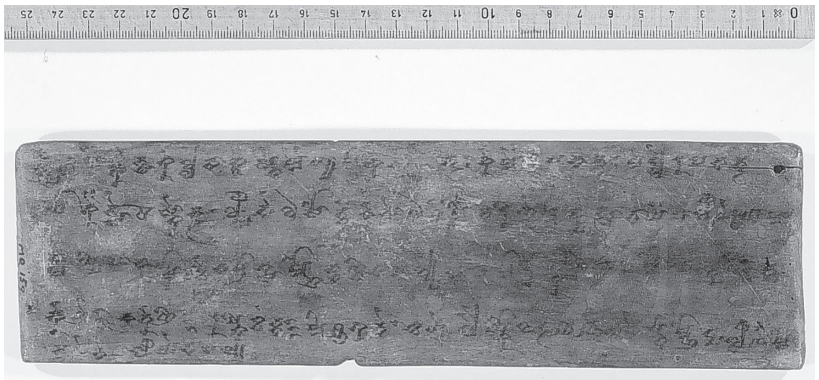
京都大学への赴任が決まった時周囲の人々が「齋藤君にもようやく場所が見つかった」と言って祝福とともに送り出してくれたのがつい昨日のように思い出されます。私がこの大学に来て真っ先に行いたかったことはトカラ語の知識を伝えることであり、以下少し個人的なことを書かせていただきます。

現在の中国新疆ウイグル自治区で10世紀頃まで使用され、系統的にはインド・ヨーロッパ語族に属し、しかも多くの点で同じケントゥム語群に分類される西方のケルト語やラテン語との類似性を示すこの言語は、ヨーロッパでは100年を超える研究の伝統があるにもかかわらず我が国ではほとんど知られていません。私がこの言語に触れたのは全くの偶然でした。前任校のサバティカルでドイツ西南部のザール州立大学に留学した理由は、研究目的として提出した「Notkerの作品を中心とする古高ドイツ語の研究」の指導を受けるに相応しい先生がこの大学に在籍していた以外に何もありませんでした。しかしどういう訳か自分の足はIndogermanistik（インド・ヨーロッパ語比較言語学）の教室に向かってしまい、独文学科ではなく言語学科に所属する学生になってしまいました。その中でも一際目を引く先生が授業をしているのを覗きに行ったところ学生はほとんど居ないので喜んで聴講を許していただきました。週のほとんどの授業をその先生から受けましたがその中にトカラ語文法がありました。後になってその先生が自他とも認めるトカラ語学の権威で一昨年の春惜しくも亡くなられたKlaus T. Schmidt先生であることを知りました。先生の授業は出席者がいつも私と社会人の学生二人きりで、その学生の職業を尋ねるとドイツのBundesligaの二部リーグに所属するザールブリュッケンチームの選手をしていたが今は建築業に携わっているという答えが返って来ました。ドイツでは元プロスポーツの選手が古代インドのリグベーダを読みトカラ語を勉強するのかと驚くとともにドイツの人文科学の層の厚さを改めて思い知らされました。ただ書庫で行われる授業では先生が回覧する本がサッカーのパスの様にその学生からビュンと飛んで来て「本は大切に扱わなくてはならない」という文化で育った私を驚かせました。帰国後はドイツで習ったトカラ語を教える機会は全くありませんでしたが、後にフランクフルト大学に提出した博士論文でトカラ語の過去分詞について扱うことが出来ました。初めに書いたように、こちらの大学に来てからトカラ語を教える機会が初めて巡ってきました。最初はポケットゼミなどで概説のようなことをしていたのですが、2012年から文学部で言語学特殊講義という授業を任され、計7年間通年講義をする機会に恵まれました。多くの学生に接してきましたが中でも後に本学他学部の教員となったアメリカ

人留学生 A 氏のことは忘れることができません。彼とは最初の年に文法を教えてからずっと毎週研究室で勉強会を開いてきましたが、私が一応教える側でいられたのは最初の数年で後はどちらが先生で生徒だか分からなくなってしまいました。トカラ語は文献の大半がサンスクリット語の翻訳であり、サンスクリット語とパーリ語をほぼ完璧にマスターしている A 氏はトカラ語の研究者として理想的であると初めから感じていました。A 氏からはいろいろなことを教わりましたが、その中でも特にインド・ヨーロッパ語における「～である」という意味を持つ状態動詞の次のような特殊な意味変化を挙げることができます。

インド・ヨーロッパ祖語の語根 *h₁es- は英語 is、ドイツ語 ist、フランス語 est の語源ですが、この語根は意味的にドイツ語で（da）sein“ 存在する、（現に）ある ” という状態を表します。この語根からゲルマン祖語では現在分詞の強語幹、弱語幹 *sanþ-/sund- が作られますが、前者 *sanþ- からは古北欧語 sannr、古英語 sōð 等の語が成立し、それらはドイツ語で wahr“ 真の ” という意味を表します。同じ意味はギリシア語の同じ語根からの現在分詞 ὤν,ὀντος（< *sōnt, *sontos）による τὸ ἐόν“ 真実 ” にも現れます。後者 sund- からは古北欧語 syn、古英語 synn（現代英語 sin）、古ドイツ語 suntea（現代ドイツ語 Sünde）が成立し、それらは “ 罪 ” という意味を表します。同じ語構成によるサンスクリット語の satya-（< *sn̥tjo-）が “ 真の ” という正反対の意味を表すことはとても興味深いと思います。インド・ヨーロッパ諸語の中にはさらに *steh₂- というドイツ語で sich hinstellen“ 立つ、出る ” という意味を表す語根が、上記の語根 *h₁es- と共に主語と述語を繋ぐコプラ（連辞）のパラディグマを形成する例が見られます。例えば、古アイルランド語の táu“bin, befinde mich” が今でもコプラとして用いられているのは、本来瞬間的な動作を表す *steh₂- という語根が接尾辞の付加により状態的な意味を持つようになったからであると考えられます。トカラ語でも同じ語根による tāk- という語幹が *h₁es- に由来する現在語幹 nes- とともにコプラ（連辞）のパラディグマを形成します。トカラ語には takarṣke という語が存在しますが、A 氏によればこの語は語構成的に tak- と接尾辞 -ṣke に分けられ、状態を表す tak- が形容詞を作る接尾辞 -ṣke と結びついて、“ 真の性質を有する ” という意味を表し、それがさらに “ 信の、正義の ” という意味に転じたということです。さらに A 氏がこの takarṣke という語に “ 信義 ” という訳語を当てたことは忘れられません。それは、「共同体において真心を以って相手に対する務めを果たし、約束を守り相手の信頼を裏切らない」というこの語が表す状況がまさに私が 15 年間在籍した総合人間学部および大学院人間環境学科で感じたそのものであったからです。当初の目的であったトカラ語の知識を伝えることができたことも本学在籍における私の大きな喜びの一つです。

（さいとう　はるゆき）



フランクフルト大学 THT ３９９８a（木簡）
２行目の以下の箇所からも千年以上前から中央アジアにおいて乾燥化が始まっていたことが窺える。
mākaise masketra osottär se śemi
（(耕作する際)力を入れすぎると地面が乾燥する）

ご退任を迎えられる先生方から

京都大学生の留学、昨今

藤田　糸子
（総合人間学部／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻）

1999年11月に採用して頂いてから20年近くにわたり、大学院人間・環境学研究科／総合人学部で、留学や国際交流に関わる仕事に携わらせて頂きました。本稿では、部局に感謝の気持ちを込めて、私自身の留学経験を若干ご紹介しつつ、京都大学生（以後、京大生）の留学の昨今に思いを巡らせてみたいと思います。なお、最近は、京大に留学している外国人留学生がさらに海外の大学に留学する「マタ留学」が増えてきました。これも京大生の留学には違いないのですが、本稿では、話を日本人学生に絞ります。

私は業務の一つとして、海外の大学に送り出す京大生の選抜に関わってきました。応募書類を読んだり面接したりするのですが、こういう制度が無かった時代に留学した私の時と比べて隔世の感を禁じ得ません。一言で言うと、「今の留学は『簡単』だけれど『大変』だなあ」という思いです。私が留学した時と少し比べてみましょう。

私は1970年代に米国の州立大学の修士課程に留学したのですが、当時、留学する学生は珍しく、大学からのサポートもありませんでした。情報収集（当時はパソコンやネットなどがない時代です！）、応募手続き、TOEFL受験（京都ではTOEFLの参考書が入手できず、受験会場もありませんでした）等々、すべて手探りしながら自分でやりました。

お金について言えば、私が留学した1970年代後半は1ドル300円程度で、まだまだドルが圧倒的に優位な時代でした。しかも、私が留学を希望していた州立大学は州内の学生に比べて州外の学生の授業料が3倍もしたので（もちろん留学生は後者です）、米国に留学するためにはかなりのお金がかかりました。

あれから43年経った現在、京大生は大学から全面的にサポートを受けることができます。大学は、「スーパーグローバル大学創成支援事業」をはじめとする様々なプロジェクトで日本人学生に占める留学経験者の割合が評価指標の一つになっていることもあり、できるだけ多くの京大生を海外に留学させようと、交流協定校を増やしたり、多様な留学プログラムを設けたりして、学生の留学を後押ししてくれます。留学に関する説明会は年間70回以上も開催され、留学に対して補助金が出ることも少なくありません（たとえば、一ヶ月間英国に滞在するサマープログラムでは、学生一人当り45万円の補助金が支給されています）。応募手続きや留学手続きは大学が親切に指導してくれますし、留学が決まればオリエンテーションもやってくれます。留学中に何かトラブルがあれば、留学先の大学と連絡を取り合って迅速に対応してもらえます。正に至れり尽くせりという感じです。

TOEFLの問題集は書店に溢れていますし、TOEFL対策専門の語学学校もあります。もちろん、京都でも受験できます。日本経済が強くなったお陰で、留学に必要な費用は相対的に随分安く

なりました。

このように、今日、京大生にとって留学は実に「簡単」になりました。留学する意志さえあれば誰でも留学できると言っても過言ではないでしょう。

では一体何が「大変」なのでしょうか。

簡単に言うと、昔は個人として留学し、勉学に打ち込むだけでよかったのに、今は「国際社会」とか「国」に無関心ではいられないということです。

私が留学した1970年代の米国は東西冷戦が社会に大きく影を落としていました。街の至る所に核戦争に備えてシェルターがあり、核戦争を想定した緊急サイレンの訓練が毎月定期的に実施されていました。人々の関心は、いかに東側からの脅威に備えるか、いかに東側を封じ込めるかということに注がれていました。そうした中で、「弱小西側同盟国」の日本からやって来た貧弱な留学生のことなど誰も気に留めなかったでしょう。私は自分のことだけを考えて勉強に集中することが許されていたように思います（もっとも、これは私の社会に対する意識が低かったからかもしれませんが）。

しかし今日、世界の状況は大きく変わりました。日本は世界第3位の経済大国となり、人々の価値観は多様化し、国家間のパワーバランスも1970年代とは大きく異なっています。留学するとは、好む好まざるにかかわらず、そうした国際社会の中に身を投じることを意味します。

ウィスコンシン大学マディソン校修士課程卒業式にて（1987年12月）

実際、学生はまず選抜の段階から、「留学したらどのような形で国際交流に貢献できると思うか」とか「Brexitについてどう考えるか」などと尋ねられます。また、留学先では、複雑な国際情勢において日本の立ち位置をどう考えるのか、出身国によって異なる歴史観にどう対処すべきなのか、等々、かつてそれほど顕在化していなかった問題にも対応しなくてはなりません。昔に比べて「大変だなあ」というのは、こういうことです。

もっとも、今の京大生に、昔は留学自体が大変だったと言ってみても、「へー、そうだったんだ」くらいのことであり、また、「国際社会とは無縁でいられない」と言っても、グローバル社会に生まれた彼らにとっては「国際化」など当たり前のことなのかもしれません。それでも先輩としては、敢えて後輩に、「今の留学は『簡単』だけれど『大変』だ」という思いを頭の片隅に置いておいて欲しいと思っています。

時代が変わり、留学が「簡単」になっても、日本や京都大学という庇護の傘を飛び出して異国の地で勉強するという行為が人生の中で大きなチャレンジであることに変わりはありません。だからこそ京大生にはどんどん留学して、自分の人生を切り開いていって欲しいと思います。またその際、留学できるのは当たり前ではなく、とても恵まれているのだという感謝の気持ちと、自分の専門分野の勉強だけでなく、生の国際社会を実際に経験してそこから何かを学んでこようという積極的な姿勢があれば、留学経験がさらに意義深いものになることでしょう。

この20年間、若い世代を世界に送り出す仕事に携わってこられたことは本当に幸せでした。改めて、京都大学および大学院人間・環境学研究科／総合人学部に心より御礼申し上げますと同時に、京大生がますます世界に羽ばたいてくれることを願って本稿を終えたいと思います。

（ふじた　いとこ）

ご退任を迎えられる先生方から

思い出すままに

髙谷　　修
（総合人間学部 国際文明系／
人間・環境学研究科 共生文明学専攻）

昔ある先生の定年退職講義に出席した時のことですが、その時先生はさり気なく「定年というものは誰にでも来るものですよ、今若い諸君にも必ずやって来ます。」とおっしゃいました。その時は、あまり切実には感じられませんでしたが、今、私にも定年がやって来ました。ここで少し、思い出すままに書かせていただこうと思います。

振り返ってみますと、私は1972年に京大に入学しました。その頃はまだ大学紛争が収まっていませんでした。昔の記憶は曖昧ですが、1972年は4月になってもまだ前年度の後期試験を行っていたのではないでしょうか。時々学内は騒然となることがありました。総合館（当時はA号館）の中庭には木造の古い二階建ての建物があり、そこで授業を受けたのを覚えています。数学の森毅先生の講義はそこでありました。また現在の人間・環境学研究科の建物がある辺りに、平屋の図書館がありましたが、すぐに壊されました。その後、今の吉田南総合図書館が建てられたように思います。

学生運動が冷めやらぬ中で、ジャズを聴き始めました。荒神口のところにはジャズ喫茶「しあんくれーる」があり、よくここへも通いました。また全国ジャズ喫茶巡りも始めました。熊本の友人を尋ねた折りに、熊本のジャズ喫茶に行って愉しんだこともありました。その頃よく聞いたのはチャーリー・パーカーやマイルス・デイヴィス、それにジョン・コルトレーンなどでした。チャーリー・パーカーの曲に Tempus fugit という曲がありますが、題名が英語ではないので、記憶に残りました。ラテン語を習うようになって、その意味が「時は逃げる」という意味であることを知りました。日本語でいうと「光陰矢の如し」くらいでしょうか。それにしても時が経つのは速いものです。あの頃からすでに半世紀ほどが過ぎました。

大学を卒業して暫くして、イギリスに勉強に行きました。ロンドンにいたのですが、日本の先生から手紙が来て、芝居も観なさい、と書いてあり、それで劇場通いを始めました。ナショナル・シアターはその中に三つの劇場を収容する複合施設なのですが、その一つにオリヴィエ・シアターがあります。この劇場はギリシアの劇場を模倣したのでしょうか、舞台は半円形にせり出した構造になっている珍しい劇場でした。ここで「アマデウス」を観ましたが、モーツァルトをサイモン・キャローが好演していました。多くの劇場にはスチューデント・スタンドバイという制度があり、学生は売れ残ったチケットを半額くらいで買うことができました。また後にノーベル文学賞をもらうハロルド・ピンターの「管理人」もオリヴィエ・シアターで観ましたが、主演はジョナサン・プライスで、大変印象的で記憶に残りました。その後の彼の映画やテレビドラマや劇場での活躍は当然という気が

します。昨日劇場で観た俳優が今日テレビドラマでも活躍している、という感じは大変スリリングなものでした。テレンス・ラティガンの「ブラウニング・ヴァージョン」はナショナル・シアターの中のリトルトン・シアターで観たのを鮮明に覚えています。前から3, 4列くらいの真ん中の席という、願ってもない席でした。この芝居はパブリック・スクールが舞台で、そこで働く古典語の教師夫妻と学生との交流を描くものですが、大変印象的でした。ギリシア悲劇の詩人アイスキュロスの『アガメムノン』が小道具として使われており、その中の台詞「神は遠くから優しい教師を慈悲深く見ている」という言葉が主人公の教師によって語られるのですが、彼の状況を考えると、なんとも皮肉な言葉のように感じられました。

さて、十八世紀イギリス文学を専門としていることもあり、西洋古典の作品も学んでおいた方がよいだろうと思い、ある先生にお願いしてラテン語の作品を一緒に読んでいただくようになりました。最初に読んだのはウェルギリウスの『アエネーイス』でした。この作品は、トロイア戦争を舞台とするもので、ギリシア軍に敗れたトロイアのアエネーアースが一族郎党を引き連れてイタリアに逃れ、その地において第二のトロイアともいうべき都市を建設し、これがローマ帝国の礎となるという話です。イタリアへ向かう途中、アエネーアース達は多くの苦労を経験します。艱難辛苦に耐えながら旅を続けるのですが、アエネーアースが部下たちを励ます言葉 forsan et haec olim meminisse juvabit は大層印象的な言葉でした。このラテン語の意味は「恐らく、これらの事もいつの日にか思い出すことが喜びとなるであろう」というものです。ラテン詩を一緒に読む時間は何ものにも代えがたい幸せな時間でした。『アエネーイス』は名句に溢れた作品ですが、多くの印象的な言葉が今でも記憶に甦ってきます。

専門の十八世紀イギリス文学との繋がりから、日本ジョンソン協会の運営にも関わるようになりました。この協会は十八世紀の文人サミュエル・ジョンソンの名を冠した学会ですが、実質的には十八世紀イギリス文学会といってよい学会です。1964年にコロンビア大学のジェイムズ・クリフォード教授が来日し、1966年に正式に学会として発足しました。2006年に創立四十周年を迎えたのですが、その時学会誌の編集を担当していた私は、東北大学の鈴木善三先生（現名誉教授）に、協会の歴史を回顧する巻頭言を依頼しました。先生は「世異なれば即ち事異なり」という題の文章を寄せられました。題名の出典は韓非子のようです。先生は、漱石以来の我が国の十八世紀イギリス文学研究の状況と海外の動向を概観され、「ジョンソン協会も、時代の変貌とともに、その姿を変えて行かざるを得ないだろうし、研究とは、本来、そうした要請に応えなければならないものである。」とされました。なぜか不思議なのですが、私には Tempora mutantur, nos et mutamur in illis というラテン語が浮かんできました。「時世は変わる、そして我々もそれとともに変わる」というくらいの意味です。近年の学内の変貌ぶりには驚かされます。願わくは良い方に変わって欲しいと思います。

ある歴史学の先生の本を読んでおりましたら、序文で Bene vixit qui bene latuit という言葉を引用しておられました。八面六臂の活躍をされた方と思っておりましたが、案外違う望みを持っておられたようです。私もこの言葉を思いつつ過ごして来たような気がします。何事にも不器用な私ですが、この点ではそれほど下手でもなかったかなと思ったりしております。

（たかや　おさむ）

ご退任を迎えられる先生方から

8 年間の“二足の草鞋”

加藤　立久
（人間・環境学研究科 相関環境学専攻）

2010 年に国際高等教育院の前身組織である高等教育研究開発推進機構に転任し、予期せず 18 年ぶりに京都大学へ帰ってきた。その 1 年後 2011 年から大学院人間・環境学研究科の併任となり、“我が研究室”に大学院生を迎入れることが出来るようになった。その後 8 年間で 6 名の修士課程修了者が卒業したが、どの大学院生も個性豊かで、それぞれに印象に残る学生であった。2013 年に岡本光弘君、相澤俊博君が、2014 年に香山貴彦君、2016 年に中村仁哉君、そして 2017 年に山口貴久君と加藤梓君が修士課程を修了して卒業した（掲載写真）。“我が研究室”の Home Page には大学院生募集のため、以下のような文章を掲げた。「磁性を持つ物質の中に、また光や化学反応エネルギーで一瞬光る物質の中に、生体の化学反応サイクルの中に、電子スピンは顔を出します。電子スピンという覗き窓から分子の構造・運動・反応性を手探りし、その覗き窓からしか見えない性質を、主に磁気共鳴（ESR）法で追求しています。具体的には、球状炭素分子・フラーレンや超分子錯体に宿る特徴的な磁性観測を進めています。スピンの不思議や分子構造の美しさに憧れを持てる学生諸君を歓迎します。」と。この宣伝文句どおりに、Keyword“分子磁性”、“電子スピン共鳴分光”、“フラーレン”、“超分子”に関する研究に没頭してもらった。岡本君はシクロデキストリンという環状糖の環に球状分子 $N@C_{60}$ をすっぽり納めて水に溶かすことを目指した。相澤君は 2 粒種入り球状分子 $La_2@C_{80}$, $La_2@C_{76}$ の特徴的な 2 個の La 核が持つ磁石性能をコンピュータシミュレーションした。香山君は、樽の形をした帯状分子シクロパラフェニレン上にある、2 種の電子と水素核の磁石コマ回転の間で発生する唸りを観測した。中村君は、空隙だらけの結晶に磁石を吸い込む“結晶スポンジ”を作った。山口君は球状分子（$Gd@C_{60}$)(CF_3)$_3$、($Gd_2@C_{80}$)$^-$ などが 7 個から 15 個もの電子を抱きかかえて強い磁石性能を示すことを証明した。加藤君は生命に不可欠な酸素分子が球状分子 $O_2@openC_{60}$ に収まってもなお示す反応性能と磁石性能を確認した。

私が 1 年生と 2 年生の一般教養共通教育に責任を担う国際高等教育院と人間・環境学研究科大学院教員を併任するため、“我が研究室” Home Page 冒頭に「私の所属は京都大学国際高等教育院と京都大学大学院人間・環境学研究科です。二足の草鞋（わらじ）と思われるのも困るので、二重所属

2013 年卒業の岡本君（右）と相澤君（中央）

の事情を説明します」と断り書きがある。学術論文に耐えられる専門知識を修士大学院学生に伝授することと、学部１年生（彼らを“高校４年生”とたびたび私は記述した）に初体験の物理化学を理解させる教育と、相反する教育ミッションのようにも思える状況を、“二足の草鞋”と表現したのである。しかし、京都大学大学院生と言えども“高校４年生”に理解を促すと同様な伝授方法が肝心だと思う８年間だった。専門知識を絵解きする例え話は、専門分野外の一般学生“高校４年生”向けの説明に必要なものと信じていた。しかし、実はその分野を専門とする大学院学生にこそ、難解な専門概念・数式を理解する手助けとして絵解きの例え話は有効なのである。逆に数式を理解する必要のない一般学生には誤解を招く“ただの嘘”になりかねない。そんなことを承知の上で、一般教養共通科目でも大学院でも絵解きするような講義を心がけた。そんな私が、良きお手本とした科学的文章がある。エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）による文章である。彼は、有名なアメリカ・ボストン生まれの詩人で、アメリカが生んだ最初の文学者とも言われ、その作品はフランス語に訳されてヨーロッパ文壇にも大きな影響を与えたそうだ。彼の作品の中に「韻文（詩歌）の理論的説明（ The Rationale of Verse ）」という詩歌における韻律を理論的に説明しようとする、極めて文学的なエッセイがある。その中に韻律の同一性（ equality ）を説明する文章があり、“結晶（ crystal ）の美しさ”に感動する一節が挿入されている。

“ Let’s us examine a crystal. We are at once interested by the equality between the sides and between the angles of one of its faces; the equality of the sides pleases us, that of the angles doubles the pleasure. On bringing to view a second face in all respects similar to the first, this pleasure seems to be squared; on bringing to view a third it appears to be cubed, and so on ...”

雪の結晶や岩塩などに見られる“結晶の美しさ”を讃えた“自然科学的な記述”が、韻律の同一性（ equality ）の説明文に挿入されているのである。極めて文学的なエッセイの中にあって異質な記述だが、韻律の同一性（ equality ）の説明を深めている。また、“結晶（ crystal ）の美しさ”を表す自然科学的記述としても秀逸であり、彼が“結晶（ crystal ）”という科学的専門知識に長けていたことを伺わせる。

“二足の草鞋”を履きながら過ごした８年間、一般教養教育ミッションに加えて、大学院教育を通して理学研究を継続維持することができた。大学院併任ポジションを提供し、この素晴らしい機会を与えて頂いた人間・環境学研究科大学院に心から感謝を申し上げて文章を締めくくる。

（かとう　たつひさ）

2014 年卒業の香山君（右）と 2016 年卒業の中村君（左）

2017 年卒業の山口君（左）と加藤君（右）

連載企画「総合人間学とわたし」

ご都合主義的「総合人間学」

月浦　崇
（総合人間学部 認知情報学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻）

真夏の京都の暑さは尋常ではない。東北地方出身の私にとって、京都の夏はやり過ごすだけでも一苦労である。しかし、今年の夏のある日、簡単には「やり過ごせない」一通の依頼文が事務から送られてきた。そこには、「総合人間学とわたし」の原稿を書いてほしいということが記されていた。私は、依頼された原稿は原則的に「断らない」ことをモットーとしているが、この依頼に関しては即答できずに承諾するまでに少し考えるための猶予を頂いてしまった。それだけこのテーマは私にとって厄介なものである。

困った時には原点に戻るのが一番なので、原稿を書き始めるためのヒントをこの依頼文の中から探してみることにした。少々長いが、依頼文の一部をそのまま引用させて頂くと、「文系・理系それぞれの先生方より、総合人間学とご専門とを踏まえて『私の考える総合人間学とはこういうものである』、『私の研究はその総合人間学の確立と発展にこのように関係し、貢献する』、あるいは『総合人間学を志す学生諸君には、こういうことを学んでほしい』といった内容で、エッセー風の読み物をご寄稿…」ということである。私はこの依頼文から何を書くべきかを考えようかと思ったのであるが、さらに混迷を深めることになってしまった。依頼文の最初には「文系・理系それぞれの先生方より」と書いてあるのだが、そもそも自分は文系なのか理系なのかはっきりしない。私は、大学の学部はいわゆる「文系学部」に入学している。確かに高校時代から理系科目の方が文系科目よりは好きだったし、文系学部とは言え二次試験に数学は課されていたが、紛れもなく大学では「文系」学生としての生活を送っていた。その後の大学院では医学系へと進学したため、今度はいわゆる「理系」の大学院生としての研究生活を送ることとなった。学位を取得した後に勤務した研究所はバリバリの「理系」の研究所だったし、アメリカから帰国した後に所属した大学の附置研もやはり「理系」の研究所だった。そのような経歴から、私の研究のアイデンティティは「文系」を基盤として、その上に「理系」が重層的に積み重なっているような形になっており、今でも自分は「文系」なのか「理系」なのか結局は判然としない。今となっては、いつの間にか自分が理系か文系かということを意識することも止めてしまった。

依頼文に記されているその他の文章にも引っかかった。「総合人間学とご専門とを踏まえて…『私の研究はその総合人間学の確立と発展にこのように関係し、貢献する』」と書かれている。ということは、この依頼文の中で想定されている「総合人間学」なる学問は、自分の専門とする学問とは「異なる」学問として相対化されることが前提となっているように感じる。現在の学問は高度に細分化・専門化されているとはいえ、医学部の専門は

「医学」に含まれるだろうし、工学部の専門は「工学」であろうし、法学部の専門は「法学」であることに疑いはないであろう。しかし、依頼文に書かれていることを前提とすれば、総合人間学部に属する教員の専門は「総合人間学」には含まれていないようである。確かに、私は自分の専門を尋ねられたら「認知神経科学」や「脳科学」と答えるであろうし、もっと説明的に言うとしたら、「こころ」の基盤となる「脳」のメカニズムを研究している、ということになる。もしも自分の専門と「総合人間学」とが相対化される関係にあるのであれば、自分の専門は「総合人間学」には含まれないことになる。さらに依頼文は次のように畳みかける。曰く「総合人間学を志す学生諸君には、こういうことを学んでほしい」ということなのであるが、教員自身が自分の専門を「総合人間学」と異なるものとして相対化しておきながら、学生には「総合人間学」を志せとはまさにご都合主義である。

散々に文句を書いておいて手のひらを返すわけではないが、実はこのようなご都合主義的な総合人間学がとても大切だと個人的には思っている。一定の枠組みを総合人間学に規定すれば、その時点で自分の専門は総合人間学になり得るかもしれない。そして総合人間学が自らのアイデンティティになり、そこに所属する教員も学生も確固たる拠り所の上で精神的安定性がもたらされるであろう。しかし同時に、総合人間学に従来的に内包されていた柔軟性（ご都合主義）は崩れ去り、陳腐な既存の価値観の中に埋没してしまう恐れもある。それは果たして、多くの学生が魅力を感じ、私たち教員が理想とする「総合人間学」なのであろうか？おそらくその答えは「否」である。理系・文系といった枠組みを私たち自身の意識から解き放ち、自分の専門とする学問分野を総合人間学に包括させたり相対化させたりしながら、学生と一緒に不安定な足元の上で面白く踊る、そんな総合人間学が私にとっては理想である。だからこそ、時と場所に応じて総合人間学は絶えず変化し続けるのと引き換えに、総合人間学はそのアイデンティティを確立することは未来永劫無いのかもしれない。それこそが総合人間学の醍醐味である。

最初にこの原稿の依頼を受けてから季節は廻り、あっという間に師走になり、すっかり外も寒くなった。おそらく京都の平地で雪が舞うのも間近であろう。京都の冬は想像以上に寒く、底冷えがする。私の地元の仙台は、東北地方に在りながら比較的温暖な気候で、ある種の統計によれば真夏日と真冬日の合計は都道府県庁所在地の中で最も少ないそうである。そんな私にとって京都の冬は厳しく、簡単にやり過ごすことはできない。…人間は甚だ勝手な生き物である。何かしら理由をつけては、夏になれば暑さを耐えられないと言い、冬になれば寒さを忌避する。季節の受け止め方一つをとっても、私はどこまでも「ご都合主義」を好むようである。

（つきうら　たかし）

連載企画「総合人間学とわたし」

総合人間学と文学の交わるところ

池田　寛子
（総合人間学部 国際文明学系／
人間・環境学研究科 共生文明学専攻）

さまざまな人間の営みを包括しうるのが文学の世界であるとすれば、私が専門とする文学と総合人間学の重なる部分はかなり大きいのではないだろうか。文学への思いを綴りながら、ここ数年の総合人間学部での経験を振り返りつつ、総合人間学とは何かに思いを馳せることならできるかもしれない。

ひとりの人間を知ることが長いつきあいの賜物であるように、文学については、経験の浅い若いうちは十分には理解できないものだと言われることがある。歳を重ねるのを楽しみにできることに惹かれて今まで文学に関わってきたのかもしれない。今となっては若いからこそ分かることもあっただろうとも思いつつ、かつて読んだ作品を読み直すと別のものが見えてくるという感覚をおぼろげながら持つのが精一杯である。総合人間学にも後からようやく分かってくるような何かがあるのかもしれない。

私が研究対象として読むのは日本語の作品ではないため、作品を読んでいていつまでも腑に落ちない箇所がある場合、それが自分の経験の浅さ、未熟さの問題なのか、それとも母語でないものを読んでいるという言語の問題なのか、という問題も生じる。一つ救いなのは、自分が惹かれる作品について、その作品の母語話者であれば即座にすべてを理解できるわけではなく、そもそも同じ作品に同じ執着を抱くわけでもないということである。作者も決して同郷人のみを読者として想定しているわけではない。言語を超えた人の繋がりを根源から考えさせる文学のありようは、総合人間学にも通じるものであってほしいと思う。

複数の言語の間を行き来するという状況は創造性の源でありうると同時に、自己分裂の危険を孕んでいる。アイルランドを例にとりたい。アイルランドには今日まで1500年近くアイルランド語文学の歴史が続いているが、18世紀以降はイギリスからもたらされた英語が急速に浸透し、現在は少数派言語としてのアイルランド語と多数派言語としての英語が共存している。20世紀後半のアイルランドで英語詩人としてデビューしたマイケル・ハートネットという詩人は、祖母が使っていたアイルランド語こそが自分を表現できる言語だと感じ、アイルランド語詩人への転身を図った。英語とアイルランド語の両方を愛し、二つの言語の間で引き裂かれた苦しみだけが理由ではなかっただろうが、詩人はアルコール依存を悪化させて58歳でこの世を去った。ハートネットの作品に私がどれほど惹かれても、そこには私には届かないものがある。だが、完全には分からないことは作品を繰り返し読むことの妨げにはならない。ハートネットはアイルランド語による詩作に取り組みながら希望と絶望の間で揺れ、深い闇の中で手探りを続けたが、そこには歓喜の瞬間もあったようだ。私は英語と日本語の両方で読み、書き、考えようとし、さらにアイルランド語を習得しようとして四苦八苦しているが、その奮闘には歓びもある。

ハートネットとしては、自分の詩の読者が皆、底なしの憂鬱を共有して沈み込んでいくことなど期待していなかった。現代アイルランド語詩人ヌーラ・ニゴーノルはハートネットと親しかったが、彼女の詩篇「飛べよ、小鳥よ」（Éirigh, a Éinin）をハートネットは好み、これを英語に訳している。ニゴーノルとハートネットのそれぞれ築き上げた世界を日本語で伝えきるのは不可能だが、原詩の冒頭を訳してみる。

飛べよ、小鳥よ、枝の先へと
梢の小枝を　鉤爪でしかとつかめよ
高らかに声を挙げよ　息のつづく限り　力の限り
比類なき音色をひたむきに求め　妙なる調べの一節を歌えよ。
さあもう一度　気づかせてやって　二倍、三倍にして

動かぬ事実を　私のような地を這う者に　―　言って
大切な人を失ったとき　私は正気を失わなかったと
どれほど悲しみに打ちのめされても　音楽は無限大なのだと。
・・・

歌う鳥の役目と詩人としての自分の役目をニゴーノルは重ねる。この世で何が起こっていようとも、自分の仕事は言葉の芸術を編み上げることであり、自分の詩を読んで一瞬すべての現実を忘れ、「一陣の爽やかな風」（a blast of fresh air）を感じてほしいと、ニゴーノルは語る。アイルランド語の未来は不確かだが、詩人たちは凛とした姿勢で生き、言葉と戯れることを忘れない。

こういった海外の詩や文学作品のテクストを前にして語り合うのに、総合人間学部はなかなかよいところである。演習では数十行の一篇の英詩を1時間あまりかけて参加者全員で読む。一つ一つの言葉、イメージ、表現、象徴、そこに込められた幾重もの意味をめぐってさまざまな発言が飛び交う。一人で読んでいた時には出てこなかった発想に、はっとさせられることもある。ある一篇の詩で、語り手「私」が一度だけ「私たち」という言葉を使っていることに誰かが気づき、「私たち」とは一体誰のことだろうかと、ひとしきり考える。こうした詩の研究会でも取り上げられるような問題点をめぐってゆるやかな時が流れる。作品に現れた言葉は人の意識と無意識の働きが紡ぎだしたエッセンスであり、その一語、一行に何か人間の本質のようなものが凝縮されているかのような気構えで「私たち」は作品に取り組む。これはとりわけ「言葉」が軽くなってしまったこの時代に、総合人間学において意識されてもよい態度ではないだろうか。

つい先日、卒論の相談ということでとりとめなく話をしていた際、学生の関心と私の関心がぴたりと重なり合う瞬間があった。その時私たちが心の中に温めていた作品の中に「死後の世界へと人を運ぶ列車」が登場し、二人ともがその描写に強く惹かれていたのだった。『銀河鉄道の夜』ではなく、彼女が読んでいたのはハリーポッター・シリーズ、私が読んでいたのはニゴーノルの詩篇「黒い列車」である。

黒い列車がやってくる
すっと駅に到着する
毎晩規則的に
あの弔いの二輪馬車のように。
乗客はいつものように
プラットホームで待っている
誰が乗るのかはわかる　黄色い星のしるしが
ついているわけではないのだけど。
・・・
でも　ひとりずつみんな乗り込んでいく
同じ列車に
いかめしい様子で待っている列車は
獰猛な野獣のようにも見える。
熱い蒸気を振りまいている
パイプの穴から。
さて　ゆっくり　動き出した
汽笛も出発の喧騒も　何も聞こえない。

私たちはといえば
あの人たちの仲間ではないと決め込んでいる。
目を閉じて
手を洗う。
コーヒーを飲んで
いつも通りの日常
あの人たちがそこにはいないような
ふりをしている。
・・・

2018年暮れ、私が自分の卒論を書いていた頃に研究会でお会いし、昨今は学会の運営などでお仕事を共にさせていただくことが多かった一人の先生の訃報が入った。5月の入院の後、治療、リハビリ、退院、自宅での療養、といった知らせが次々と届き、皆で先生の復帰を心待ちにしていた最中だった。研究会の帰りの電車の中で立ったままで何でも相談に乗ってくださるような先生だった。「面白い人生だった」と最後に一言残されたという。この世からいなくなられたという感じはない。先生の記憶は私の中で生きる。死者が生き続けていることは、文学が、そして民間伝承の数々が証言している。心の中に生きる目に見えないものは、文学、そして人間にとって、なくてはならない現実の一部であろう。

総合人間学の観点に立つとは、理系文系を問わず、それぞれが専門とする分野が何であれ、自らの生と死、未来に残したいもの、心の内も外も視野に入れて学び、探求したいことを見出すということだと考え、そこから豊かで「面白い人生」が見えてくると信じたい。

（いけだ　ひろこ）

連載企画「総合人間学とわたし」

総合人間学ってなんなんや💢

酒井　敏
（総合人間学部 自然科学系／
人間・環境学研究科 相関環境学専攻）

今から30年近く前、教養部が改組されて新しい学部ができる時、「総合人間学部」という名前を聞いて「なんじゃそれ？」と思ったのは、たぶん私だけではない。文学部や理学部といった既存の学部名に対して、総合人間学部という名前は何をする学部なのかさっぱりわからない。

いわく、「現代の社会は高度に専門分化して行き詰った」ので「新たな人間探求のためのパラダイムを創出する」のだ。

前半部分はわからなくもない。近代科学の体系が完成度を高める一方で、それぞれの領域が「タコツボ化」して行き詰まっているという問題意識はみんな持っていた。それは、単に体系が完成に近づき、やることがなくなってきたということではない。20世紀はニュートン力学以来の決定論的世界観がガラガラと音を立てて崩れていくのを目の当たりにした世紀でもある。特に、1963年のエドワード・ローレンツによるカオスの発見はそれを決定的にし、その後、次々に要素還元主義的決定論の限界が明らかになってきた。（カオスがよくわからない人は、YouTubeで「電卓カオス」を検索してください）総合人間学部が発足した1990年代はそんな時代だったのだ。

しかし問題は後半。「新しいパラダイム」の具体的なイメージはなかった。要素還元主義的に専門分化したことが問題なら次は「総合」だ、というのはあまりにも乱暴だ。だいたい、総合と言っても何をすればいいのか？

総合って全部やれってことか？一つの分野だけでも大変なんだから、そんなの無理に決まってる。では、基本的な根っこのところだけ、浅く広くいくつもたくさんやればよいのか？そんなことしても、そんなの単なる「物知り」で、その道の専門家に勝てっこない。ならば「総合人間学会」を立ち上げて一つの学問分野を作ろう！いやいや、そもそもタコツボがいかんと言うのに、もう一つ新たにタコツボ作ってどうする？

総合人間学部発足当時、こんな議論を延々とやっていた。そんな時、頭の中でイメージしている「学問分野」というのは、図1のような感じだろう。各分野は独立して、それぞれの世界を構築している。このイメージだと、「総合」と言っても、単純に足し算のイメージしか出てこない。

実は、総合人間学部発足当初から、教員の間では「一つの分野をきっちりやらなければ、異分野融合などできない」という意見はあった。これは

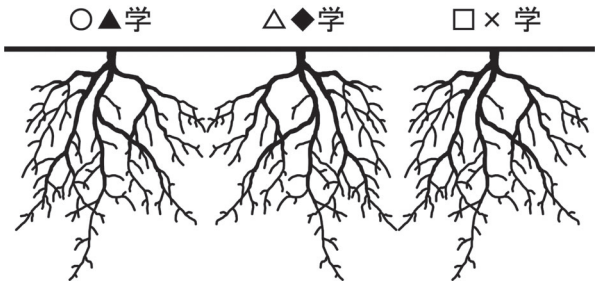


図1　旧来の学問体系のイメージ

教員が旧来の分野を守るための保守的な意見に聞こえるかもしれないが、むしろ異分野融合に積極的な人ほど、このような意見を持っていた。各専門の入口のところは、わかりやすく単純になるように整理したんだから、それをごちゃまぜにしたら意味がない。その分野を深く掘り進んだところで、別の世界とつながっていくんだ、という意見である。実際に、いろんな分野の知識に接した実感としてはそうなのだ。ところが図１のようなイメージから、それを説明する理屈を引き出すことはできなかった。

総人でそんな議論をしているあいだに、それまでの決定論的な予定調和な世界ではなく、カオスな世界を扱う「複雑系」と呼ばれる分野の研究が進んできた。その中で我々が住む世界（自然界、人間社会を含めて）にはスケールフリーネットワークと呼ばれる構造がかなり普遍的に存在することが明らかになってきたのだ。この構造は、図１の学問体系を現す「樹形図構造」とは全く異なる形をしている。樹形図構造は「根本原理」から出発して「末端」に至る方向性があるが、スケールフリー構造には、それがはっきりしない。ここで、詳しい説明をする余裕はないが、極めて荒っぽい言い方をすると、すべては「鶏が先か、卵が先か」という堂々巡りの結果として出てくる構造である。

このような構造が我々の周りに普遍的に存在するということは、この世界が何か一つの「正しい」根本原理に基づいて成り立っているわけではないことを意味する。つまり、すべては成り行きで決まっている。もちろん、これまでの学問体系が間違いだと言っているのではない。それはそれで正しい。しかし、それは局所的または条件付きの正しさでしかないのだ。

こういう世界観は、生物や地球の進化を見ていると納得してしまう。そもそも、地球上に初めて生物が生まれた時、大気に酸素はない。その生物にとって酸素は毒だったのだ。そこに、その毒を出すとんでもない生物が生まれる。武器を持った生物は強いので、地球を制覇し、地球を毒だらけにしてしまった。これを環境破壊と言わずして、何を環境破壊というのか。しかし、生物はこれで終わらない。その毒を逆に利用する生物が出現する。その子孫が我々である。絶対的な「正しさ」など、どこにもない。

そんな世界観を図にしてみると、図２のようになるのではないだろうか？世界はカオスなスケールフリーネットワーク（図のバックのモジャモジャ）で、それをある視点で単純化して整理したものが個々の学問体系である。そして、それらは先に行けば行くほど、他の体系と重なって絡み合ってくる。当然、逆向きの論理もあり得るが、それは学問体系が世界のある側面を切り出した「近似解」でしかないからだ。当然、先の方では別の見方があり得る。そう考えれば、先ほどの「その分野を深く掘り進んだところで、別の世界とつながっていく」という意味も見えてくる。

総合人間学とは何なのか？いまだによくわからないが、少なくとも、図１のようなイメージで世界をとらえるのではなく、図２のようなイメージで世界をとらえて、人類の将来を考えるものなのではないかと思う。

（さかい　さとし）

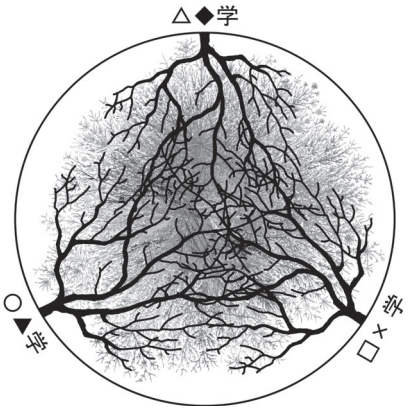


図２　現実世界と学問体系のイメージ
バックの複雑な構造は、インターネットとルーターの接続構造で、スケールフリーネットワークになっている。（Barabasi, The physics of the Web, Physics World 2001）

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第62号をお届けいたします。春は別れと出会いの季節と言われますが、今号では、この3月末をもってご退職になる5名の先生方からご挨拶を頂戴しました。いずれの先生方も研究者ならびに教育者としての信念を綴られており、大いに啓発されました。長きにわたる教員生活、本当にお疲れ様でした。第二の人生を豊かにお過ごしいただくとともに、今後も末永く我々を温かくお見守りください。また、連載企画「総合人間学とわたし」には3名の先生方からご寄稿をいただきました。それぞれに大変に興味深い「総合人間学」観が展開されていますので、どうぞご一読ください。さて、今号より、本誌の表紙と裏表紙のデザインが変更になりました。総合人間学部と人間・環境学研究科の「一体感」をテーマとして、デザインの公募を行いましたところ、多くのご応募がありました。いずれの作品も甲乙つけがたいものばかりでしたが、広報委員会での厳正な審査の結果、人間・環境学研究科 共生人間学専攻 博士後期課程1回生の長谷 憲一郎氏の作品を採用することになりました。長谷氏は、学部名と研究科名に共通する「人」をモチーフに手書きでデザインされたとのことです。長谷氏だけでなく、ご応募いただいた多くの皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

（T・H）

2018年9月、欧州 国際教育協議会で発表メンバーと（スイス）

総 合 人 間 学 部
人間・環境学研究科

広報委員会